

海女（詳細版）

海女とは、アワビ、貝類、海藻などさまざまな海産物を海底から採集する女性ダイバーです。海女は日本と韓国だけに見られます。

海産物の豊富な伊勢志摩では、その歴史は何千年も前にさかのぼり、759 年あたりに編纂された歌集、万葉集に、初期の頃の海女の話が残されています。現在、伊勢志摩にいる海女の数日本一です（2010 年の時点で 973 人）。

海女は呼吸装置を使いません。代わりに、潜水するときに特別な呼吸法を使って息を止める方法を身につけなければなりません。例えば、水面に出るときに口を少し開けてゆっくりと息を吐き、『磯笛』として知られる口笛を吹くような音を出します。ほとんどの海女は 1 分ほど息を止めます。水中にいる時間は『50 秒の勝負』と呼ばれています。昔の海女は、腰巻以外何も身につけずに冷たい水に挑みましたが、現代の海女はウェットスーツや大きな一眼の潜水メガネを付けます。

海女には、徒人と舟人という、主に 2 つの漁法があります。徒人法では、海女は腰に縄を巻き、海面に浮かぶ木製の樽に縄を結び付けます。一方、舟人法は伝統的に夫婦で船に乗って行きます。海女が重いオモリを持って潜水している間、夫は船上で待ちます。この方法では、急速に潜水し、徒人法よりも深く潜ることができます。その後、夫が海女を、滑車装置を使って巻き上げます。これらの方法は地域によって異なります。

生活を守るため、また海洋生物の個体数を保護するため、海女には厳しい決まりがあります。アワビは、産卵期にあたる時期（通常 9 月から 12 月）は採集が禁止されています。さらに、アワビが体長 10.6 センチ以上にならないと採ってはいけません。アワビは成長が遅く、その大きさになっていれば、少なくとも 1 回は繁殖の機会があったことを意味します。この規則は「アワビは 3 年待てば美しい嫁になる」という海女の言葉に表れています。

さらに、漁期中、地区の海女は漁に出る日を決められています。天然資源を保護するため、許可されている漁の日数や長さも、自治体によって厳しく規制されています。

海女は、日本でもっとも重要な神社である伊勢神宮と歴史的に強い関係があります。2000 年前、国崎にいた海女、お弁は倭姫命にアワビを献上したと言われています。伊勢神宮を創建した倭姫命は、その味を堪能し、神饌という神聖な食事の一部として神にアワビを献上するよう決めました。神に捧げるこのバランスの取れた食事には 30 種類の食べ物があり、すべて高品質で、地元産のものばかりです。この伝統は現在も続いており、使われるアワビは伊勢志摩の国崎で採集します。お弁は国崎にある海士潜女神社に祀られているため、この地域で採れたアワビはお弁の恵みを受けていると考えられています。

菅島のしろご祭のように、海女に関わりのある儀式や祭りがたくさんあります。しろご浜では、毎年 7 月に開催されるこの祭りの日以外、海女が潜水することは規則で禁止されています。アワビを採るために海女が競い合うのを観光客も見学できます。つがいのアワビを見つけるのは幸運とみなされており、勝者はその年の海女頭に任命されます。また、海女たちは衣類や用具を星や格子柄で飾ります。これらはそれぞれ『セーマン』『ドーマン』と呼ばれています。糸で刺しゅうしたり、貝紫色のインクで描いたりしたこの伝統的な印は、身につける人を悪霊や予測不可能な海の自然から守ると考えられています。